イエスの旅

福音書を読むとイエスは３０歳を迎えてからずっと旅をしていることがわかる。山に登り、山を下り、川を渡り、湖を渡り、町から町へ。旅の途中で弟子たちを見出し、病んでいる人を癒し、人々に説教をしながら旅をつづけた。けれど旅の終わりに何が待っているのか、初めからイエスはご存知だった。それでも歩みを止めることはなかった。どうして最後まで旅をつづけられたのだろうか。

わたしは今年６月、初めてモンゴルに旅をした。生まれて初めてゲルに泊まり、そのゲルのお母さんの作るヤギのミルクティーや家庭料理をいただいた。モンゴル語は話せなかったけれど、翻訳機を使ったり身振り手振りで交流した。ゲルの暮らしは電気はきているけれど水道のない暮らしだった。水は大きな甕の中に蓄えられていて、なくなると買いに行かなくてはならない。だから大切に使わなければと気づかされた。どこまでも続く大草原。美しい朝焼けや満天の星空。草原をいく馬の群れ。ゲルに当たる風の音や雨粒の音まで今もはっきりと思い出せる。

ある時、青空と雲と太陽と大草原が広がる中でわたしはふとマタイによる福音書６章のみことばを思い出した。

空の鳥をよく見なさい。

野の花がどのように育つか注意してみなさい。

わたしはその時、自分が世界とひとつになっていると感じた。内側も外側もこの世界のすみずみまで結ばれている。そしてたしかに神の存在を感じた。それもとても近くに。まるで包み込まれるような心地よさで涙が出そうだった。神はこの世界を愛しておられる。そしてわたしのことも見守ってくださっている。愛してくださっている。本当に素直にそう感じられた。

イエスもきっと旅の間、同じことを感じていたのではないか。神の愛を感じ、神に深く信頼していたからこそ最後まで旅をつづけられたのだ。わたしの旅はイエスほど過酷ではない。でもやはり最後はわかっている旅だ。どんな形であっても必ず終わりがくる。願わくばあの大草原で感じた感覚をずっと持ち続けたい。最後のその時までずっと。